

Ⅳ 調査結果

1973年の予備調査を基礎に、1974年 7, 9, 10 月の3回にわたる現地調査により姥屋敷およびその周辺部を含め自然植生から代償植生までの植生調査が行なわれた。その結果自然植生は3群集, 1群落, 代償植生が2群集8群落, その他植林3がみとめられた。みとめられた植物群落を中心に、姥屋敷レクリエーション敷地内における現存植生図および潜在自然植生図が縮尺1:4000の地形図に描かれ、あわせて岩手山山麓部における潜在自然植生が考察された。

1. みとめられた植物群落

A 自然植生

Natürliche Vegetation

姥屋敷には自然植生はハンノキ林及び湿生草原以外に全く残されていない。大部分は人為的影響により他の植生におきかえられている。岩手山や岩手山山麓部の海拔約600m付近以高、あるいは岩手県、秋田県を結ぶ仙岩峠付近で自然林の代表とされるブナ林が調査された。

1) ヒメアオキ-ブナ群集

Aucubc-Fagetum crenatae Miyawaki et al. 1968 (Tab.3)

姥屋敷を中心とする海拔400~500m付近の低山帯では現在ほとんどみられないが岩手山の海拔700m以上およそ1100m付近までや仙岩峠の600m以上の地域には高木層にブナが被度3~5と優占した林分がみられる。くすんだ淡緑色の樹肌に白い大きな地衣類による斑点がめだち、全体に白くみえる樹肌は林内では明かるく、林床をおおっている1.5~2mのチシマザサや常緑のヒメアオキ、ヒメモチ、ハイヌガヤなどの低木をくっきりと映し出し、日本海側の自然林を代表させる景観を呈している。このようなブナ林は立地に応じて住みわける植物によって区分され岩手山周辺地域ではヒメアオキ-ブナ群集とマルバマンサク-ブナ群集がみとめられる。ヒメアオキ-ブナ群集はヒメアオキ、エゾツリバナ、シノブカグマ、ハイヌガヤで区分され裏日本多雪地にもっとも広く生育している。岩手山に隣接する秋田県乳頭山から秋田駒ヶ岳にかけての山地斜面、あるいは乳頭山から大白森、小白森にかけて同様に斜面一帯の大部分がヒメアオキ-ブナ群集によりおおわれている。これらの林分では樹高の高いもので25mを超えるものもあるが、岩手山山麓の網張スキー場や岩手山、あるいは仙岩峠では20m前後の高木林を形成している。ヒメアオキ-ブナ群集は伐採後の回復途上の林分ではブナが被度+と少なく、ミズナラ、ハウチワカエデ、ホオノキ、ベニイタヤなどが混生しているものもある。一般に裏日本型気候の多雪地では高木第1層にブナが被度3~5と優占し、亜高木層にベニイタヤ、ハウチワカエデが生育し低木層

にチシマザサが優占している。

チシマザサは冬季、雪の下にかくれ、雪により冷風をさえぎり雪の保温効果のもとに生育している。冬季の深雪による保温効果は常緑植物のヒメアオキ、エゾユズリハ、ヒメモチなど矮生の生活形をもつ種類の生育を助ける一因となっている。

一般にヒメアオキーブナ群集及びマルバマンサクブナ群集は組成的に標徴種が混生し、区分が明瞭にされないことがある。しかし比較的地域性が認められ地域的には多くの場合区分が可能である。今回 Tab. 17 に示されているように日本海型の多雪地域のブナ林の組成表が常在度表で比較・考察がされた。その結果、広域的なヒメアオキーブナ群集の標徴種としてはヒメアオキ、ハイヌガヤ、クマイザサ、チマキザサがみとめられる。とくに積雪量の多い、富山県、新潟県下ではユキツバキが高常在度でみられる。クマイザサ、チマキザサは形態がきわめて類似しているがクマイザサは葉裏が有毛であることにより区分されている (Suzuki, S. 1967)。

また一般に日本海型多雪地域のブナ林はオオバクロモジブナ群集として広くみとめられているが (Sasaki 1970), すでに宮脇, 伊藤, 奥田 1964 によりヒメアオキーブナ群集が発表されていること及び立地的に住みわけするマルバマンサクブナ群集がみとめられ内容が分けられていること (宮脇, 大場, 奥田, 中山, 藤原 1968) によりオオバクロモジブナ群集は 2 群集に区分されることが確認された。



Phot. 7 岩手山を紅葉で埋めるブナ林 (ヒメアオキーブナ群集及びマルバマンサクブナ群集)。

Fagus-Wälder (*Aucubo-Fagetum crenatae* und *Hamamelo-Fagetum crenatae*) bedecken in leuchtenden Herbstfarben den Berg Iwate.

2) マルバマンサク—ブナ群集

Hamamelo-Fagetum crenatae Miyawaki et al. 1968 (Tab.3)

岩手山の海拔 1000m 以上などの高海拔地のブナ林や、やせ尾根あるいは風衝が激しい斜面などではホツツジ、ヤマツツジ、ムラサキヤシオなどツツジ類やツツジ科植物を多く構成種にもつブナ林がみられる。このような林分は広域的にマルバマンサク、ホツツジ、イワウチワを標徴種及び区分種としてマルバマンサク—ブナ群集にまとめられる。姥屋敷周辺とくに岩手山の海拔 1000m 付近の南から西向き斜面ではオオバスノキ、タケシマラン、ウリハダカエデ、ショウジョウバカマ、ウスノキ、チゴユリ、マルバマンサク、シュロソウ、コヨウラクツツジ、ハクサンジャクナゲなどを地域標徴種及び区分種としてマルバマンサク—ブナ群集にまとめられる。マルバマンサク—ブナ群集はブナ林伐採跡に復元した二次林などの、立地が貧化しているところの植分も含まれる。

岩手山や仙岩峠におけるマルバマンサク—ブナ群集はさらにオクモミジハグマ、イブキゼリ、コガネキク、オオシラビソ、エゾノヨロイグサ、ナンブトウヒレン、キタゴヨウで区分される下位単位がみとめられる。このような林分は岩手山の南西斜面 1000~1170m のブナ林上限付近に生育している。

3) タチアザミ—ハンノキ群集

Cirsio-Alnetum japonicae ass. nov. (Tab.4)

東北地方をはじめとして日本全国の沖積低地に広がる大水田地帯の多くは、かつてハンノキが



Phot. 8 調査地内に残されているハンノキ群落、春季にミズバショウが林下の水深浅い流水中に白い仏炎包を開く。

Eine im Untersuchungsgebiet noch erhaltene *Alnus japonica*-Gesellschaft. Im Frühling blüht in diesem Wald an den Ufern der Gewässer *Lysichiton camtschatcense*.



Phot. 9 浅い水流中に生育するミズバショウ。
Lysichiton camtschatcense wächst in seichtem Wasser.

高木層に優占する湿生林分でおおわれていたと考えられる。残念ながら常緑広葉樹林域ではハンノキ林はきわめて少なくなっているが、東北地方から北海道にかけては比較的多く残されている。とくにレクリエーション施設予定域の姥屋敷をはじめとしてその周辺にはハンノキ、ヤチダモ、トネリコなどが高木層に優占し、亜高木層や低木層にはノリウツギ、イヌザクラ、カンボク、イソノキ、クロウメドキなどの湿生低木が生育している。草本層にはサクラソウ、ミズバショウ、オオカサスゲがとくに湿生地に生育し、やや、水分が少ないところにはハイイヌツゲが生育している林分がみられる。このようなハンノキ林は他のハンノキ林と比較しタチアザミーハンノキ群集として示された。ハンノキ林の立地は、一般に排水が悪く、わずかに泥炭化した立地で貧養、多湿地である。地下水が高く、無機土壌が堆積し有機物が形成されてくるとヤチダモが多く

なり、さらにハルニレ群集に移行する。姥屋敷のタチアザミーハンノキ群集は、今は田園景観に変わってしまっている日本のふるさとの山村景観の代表の1つである (p. 50参照)。

4) 湿原植物群落 (春子谷地湿原)

Moor-Vegetation (Haruko-yachi-Moor)

姥屋敷内のハンノキ群落に接した小湿地や近くの春子谷地にはきわめて自然に近い湿原植物群落が見られる。とくに春子谷地ではミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ホザキノミミカキグサがイヌノヒゲ、コイヌノヒゲ、イトイヌノハナヒゲなどのミカヅキグサ属 *Rhynchospora* の植物と混生して生育している。この湿原はとくに岩手県下では数少なくイネ科植物やカヤツリグサ科の植物が多い。また湿原中央部にはミズゴケ類の発達が見とめられる。

湿原周辺の流水縁にはホソバノヨツバムグラ大型スゲ群団のオオカサスゲ群集やカサスゲ群集が带状に見られる。水が停滞した Schlenke 状の立地には本州では珍しいホロムイクグの植分が見られる。降水後の水深 4 cm の Schlenke ではシロミノハリイヤーチスゲ群落が見られる。細流ではサギスゲーヤチスゲ群集が带状に見られる。

やや乾燥した立地では中間湿原植生のホロムイスゲーヌマガヤ群集が一部分布している。

今回の春子谷地湿原の調査資料はさらに湿原についての再調査を早期に行ない次の機会にまとめて発表したい。



Phot. 10 春子谷地概観
Übersicht über das Harukoyachi.



Phot. 11 ハンノキ, スマガヤ, ナガボノシロレモコウを混生しているオオミズゴケ群落。
 Mit *Alnus japonica*, *Moliniopsis japonica*, *Sanguisorba tenuifolia* var. *alba* wächst
Sphagnum palustre zusammen.



Phot. 12 本州では珍しいホロムイクグ。高層湿原構成種である。
 Die in Honschu seltene *Carex oligosperma*, eine Art der Hochmoore.



Phot. 13 シュレンケに生育しているヤチスゲ。
Carex limosa in einer Schlenke.

5) オオバセンキュウーオオバタネツケバナ群落

Angelica geniflexa-Cardamine scutata-Gesellschaft (Tab. 5)

姥屋敷内の川幅 2～3 m の細い清流沿いにオオバセンキュウ、オオバタネツケバナ、ツリフネソウ、チシマネコノメ、オニシモツケなどが塊状に生育する植分がみられた。草丈 60～80cm で常に清流が流れ、夏季の暑気にも冷風を送りこみこの地域だけはひんやりとした冷たい環境を保持している。一般に今はきわめて少なくなっている植分であるが、まだ、開発の手が加えられていない姥屋敷にみられる。

オオバセンキュウ、オオバタネツケバナ、ツリフネソウ、チシマネコノメソウを区分種としてオオバセンキュウーオオバタネツケバナ群落としてまとめられた。

Tab. 5 オオバセンキュウーオオバタネツケバナ群落
Angelica geniflexa-*Cardamine scutata*-Gesellschaft

Nr. d. Aufnahme:	調査番号	1	2
Datum d. Aufnahme:	調査年月日	'74	'74
		7	10
		7	20
Höhe ü. Meer (m):	海拔高	405	
Größe d. Probefläche (m ²):	調査面積	0.5 × 1	2 × 5
Höhe d. Krautschicht (m):	草本層の高さ	0.6	0.8
Deckung d. Krautschicht (%):	草本層植被率	30	60
Deckung d. Moosschicht (%):	蘚苔層植被率	20	30
Artenzahl:	出現種数	14	15
<u>Trennarten d. Gesellschaft:</u>	<u>群落区分種</u>		
<i>Angelica geniflexa</i>	オオバセンキュウ	1.2	4.4
<i>Cardamine scutata</i>	オオバタネツケバナ	2.2	1.2
<i>Impatiens textori</i>	ツリフネソウ	+ .2	2.2
<i>Chrysosplenium kamtschaticum</i>	チンマネコノメ	1.2	+
<u>Begleiter:</u>	<u>随伴種</u>		
<i>Filipendula kamtschatica</i>	オニシモツケ	1.1	+ .2
<i>Petasites japonicus</i>	フキ	1.2	+
<i>Pellia</i> sp.	ミズゼニゴケの一種	M	1.2 3.3

出現一回の種 Außerdem je einmal in Aufn. Nr. 1: *Oenanthe javanica* セリ 2.2, *Rumex longifolius* ノダイオウ 2.2, *Leptogramma mollissima* ミゾシダ +, *Carex stenostachys* var. *cuneata* ミチノクホンモンジスゲ +, *Osmundastrum cinnamomeum* var. *asiaticum* f. *fokiens* ヤマドリゼンマイ +, *Plagiomnium* sp. M-1.2, in 2: *Senecio cannabifolius* ハンゴンソウ +.2, *Carex forficula* タニガワスゲ +.2, *Viola verecunda* ツボスミレ +.2, *Cirsium nipponicum* ナンブアザミ +, *Galium trifloriforme* オククルマムグラ +, *Rumex* sp. +, *Hypnum*-1 sp. M-+.2, *Hypnum*-2 sp. M-+.2.

B 代償植生

Ersatzgesellschaften

人間の影響によって、立地本来の自然植生が様々な人為的影響下の植生におきかわったものを代償植生という。ある一定の人為的影響が続くかぎりその対象となる植生は持続する。姥屋敷をはじめとして岩手山山麓部では長い間薪炭林として過度の伐採とつりあって生育してきたコナラーミズナラ林、人為的管理のもとに植栽されているアカマツ、スギ、カラマツ植林、ススキ草原、放牧地とし利用されている牧草地、畑地、スキー場あと地など自然植生から代償植生への植生の変貌は著しい。

1) オオバクロモジ-ミズナラ群集

Lindera umbellata var. *membranacea*-*Quercus mongolica* var. *grosseserrata*-Ass. Ohba 1973 (Tab. 6)

姥屋敷をはじめとして、東北地方の海拔 500m 付近までの低丘陵地にはコナラ、ミズナラが高木層に多く生育した林分が多い。このような林分は南は鹿児島県北部から北は本州最北端まで二次的に生育する林分に共通種が多い。とくに姥屋敷やその周辺部で調査された資料では東北地方低山帯に共通するオオバクロモジ-ミズナラ群集にまとめられた。

オオバクロモジ-ミズナラ群集は樹高 6~12m 程度が平均で、時に 20m に達する林分もみられる。高木層、亜高木層にはコナラ、クリ、ハリギリ、オオモミジ、ヤマモミジ、カスミザクラ、アズキナン、ミズナラなどが株立ちして混生している。低木層にはガマズミ、ムラサキシキブ、コマユミ、ウワミズザクラなど常緑広葉樹林域の二次林に生育する種類が生育している。

オオバクロモジ-ミズナラ群集はさらに、過去のひんばんな伐採により、若齢林では地味が劣っている立地が多い。姥屋敷では樹高 6~10m と比較的 low、網張スキー場周辺でみられる、回復途上の林分よりも立地が悪化している。また自然林に回復がすすむにつれブナ林の本来の構成種が多くなってくる。立地が悪化することによりマルバマンサク-ブナ群集構成種がところかまわず生育しやすい。

東北地方のコナラ林、ミズナラ林については単発的に調査報告が行なわれている（宮脇・奥田



Phot. 14 調査地の大部分を占めるオオバクロモジ-ミズナラ群集概観。

Die größte Fläche des Untersuchungsgebietes wird von der *Lindera umbellata* var. *membranacea*-*Quercus mongolica* var. *grosseserrata*-Ass. bedeckt.

・佐々木他 1970 男鹿半島, 宮脇・佐々木 1976 下北半島の例, 越前谷 1973 大滝山, 大場 1973 清津川)。

宮脇らにより 1970 年の日本生態学会仙台講演でカスミザクラ-コナラ群集の名で発表されているが, 組成表が未印刷であること, さらにカスミザクラは表日本に一部分布することなどにより, その後発表された大場 1973 によるオオバクロモジ-ミズナラ群集の名がここに採用された。姥屋敷や, 岩手山, さらに秋田県東部の岩手県境付近ではオオバザサ, ミチノクホンモンジスゲなど地域的な種がみられる。一般に一つの自然植生に対し限られた数の代償植生を擁するが, ヒメアオキーブナ群集を自然植生と考えた場合, オオバクロモジ-ミズナラ群集は, マルバマンサク-ブナ群集の構成種をもたないことより, ヒメアオキーブナ群集の代償植生と考えることが可能である。大場 1973 では標徴種及び区分種を厳密には東北地方のコナラ-ミズナラ林と比較した常在度表を記載していないが, 種組成の面では広く共通種をもつ。したがって名前の如何はともかくヒメアオキーブナ群集の代償植生として一応オオバクロモジ-ミズナラ群集としてまとめられた。

姥屋敷ではさらにツルリンドウ, ヤマグワ, ハナイカダ, ツルウメモドキ, ヒトリシズカ, ノリウツギ, ナナカマド, クマヤナギ, トリアシショウマ, ノイバラ, クマイザサで区分されるツルリンドウ亜群集と, 特別な区分種をもたない典型亜群集に下位区分された。



Phot. 15 姥屋敷ではオオバクロモジ-ミズナラ群集の林床にオオバザサが優占してみられる。

In der Bodenschicht der *Lindera umbellata* var. *membranacea*-*Quercus mongolica* var. *grosseserrata*-Ass. dominiert *Sasa megalophylla*.

典型亜群集は乾燥型の二次林に広くみられ、姥屋敷ではその大部分のコナラ・ミズナラ林が含まれる。

ツルリンドウ亜群集は遷移が進んだ林分で中～適潤地に生育する。ツルリンドウ亜群集はさらにブナ、トチノキ、ヒメモチ、チマキザサで区分されるブナ変群集、特別な区分種をもたない典型変群集及びサワシバ、アオスゲ、ヤマナラン、フタリシズカで区分されるサワシバ変群集に区分された。ブナ変群集は網張スキー場周辺の二次林で遷移が進み、潜在自然植生のヒメアオキーブナ群集の構成種を区分種にもつ。サワシバ変群集は適湿地で、とくにオオバザサやクマイザサの侵入が少ない立地では、フタリシズカ、キンミズヒキ、ミツバツチグリ、ヨツバムグラ、ツリガネニンジンなどの草本植物が豊富となり出現種数 63～83 と多い。



Phot. 16 高木層に達するハウチワカエデ。
Acer japonicum reicht bis in die höhere Baumschicht.



Phot. 17 小岩井有料道路周辺のオオバクロモジ-ミズナラ群集。後部にみえる網張温泉付近の林分はヒメアオキ-ブナ群集に復元している。

Lindera umbellata var. *membranacea*-*Quercus mongolica* var. *grosseserrata*-Ass. in der Umgebung der Koiwai-Autostraße. Im Hintergrund wächst das *Aucubo-Fagetum crenatae* wieder auf.

2) 疎 林

Lichte Wälder (Tab.7)

姥屋敷のレクリエーションセンター施設敷地内には樹高4~8mで低木層の植被率が10~30%と低く、林床にはオオバザサが植被率80~90%と高い被率でおおい特異な景観を呈している。この植分は立地により構成種が異なり、ミツバウツギ-オオバザサ群落、カスミザクラ-オオバザサ群落、ハンノキ-オオバザサ群落及びカシワ-オオバザサ群落が区分された。それぞれの群落は、立地の相違により生育する木本層の種組成が異なっている。

a. ミツバウツギ-オオバザサ群落

Staphylea bumalda-*Sasa megalophylla*-Gesellschaft

ミツバウツギ-オオバザサ群落はアカマツ、ノイバラ、ツリバナ、ミツバウツギ、キタコブシで区分される。総合レクリエーションセンター西側に位置したゆるやかな階段状地の平坦地に、アカマツ植林に周囲をかこまれた開放景観を形成している。樹高4~5mと低く、アカマツ、サワフタギ、ヤマウルシ、ミヤマザクラが被度は少ないが個体数多く生育している。草本層は1.5mと人の身長とおよそ同じ高さでオオバザサが一面におおい、わずかにミツバアケビ、ワラビ、

トコロ、ナンブアザミ、オオバギボウシ、ミチノクホンモンジスゲ、ヒトリシズカなどの草本植物がオオバザサの下に生育している。

b. カスミザクラ—オオバザサ群落

Prunus verecunda-Sasa megalophylla-Gesellschaft

構成種数が21種と少なく、やや適潤開放地に、イソノキが被度2と多く生育し、ウワミズザクラ、ミヤマザクラ、カスミザクラ、タカネザクラなどサクラ属 *Prunus* が多く生育している疎林が1ヶ所調査された。この植分は他の疎林と比較しカスミザクラ及びタカネザクラを区分種としてカスミザクラ—オオバザサ群落にまとめられた。

一般にコナラ林ではミヤマザクラ、タカネザクラの生育はきわめて少ない。姥屋敷では二次林中に頻繁にミヤマザクラ、タカネザクラの生育がみられる。これは岩手山が近くに位置することより、頻繁な人為的影響で、低海拔地域に分布する植物が上昇しただけではなく、高海拔地域に生育する植物も下降し混生していることが推察される。

c. カシワ—オオバザサ群落

Quercus dentata-Sasa megalophylla-Gesellschaft

総合レクリエーションセンター施設敷地のもっとも海拔高度の高い立地には乾性立地に生育するカシワが被度2で生育している。カシワは一般に海岸の古砂丘地や、火入れ後の焼きあとに、先駆植生として生育し、群落を形成する。センター敷地では海拔485mのもっとも高い地点で、凹凸がみられる平坦地にカシワをはじめとし、キブシ、マルバアオダモ、ヤマグワなどの低山地生木本植物とオオモミジ、アオダモ、コシアブラ、ベニイタヤなどのブナ林構成種、さらにススキ草原構成種であるススキ、オカトラノオ、チゴユリ、オトコヘシ、ミツバツチグリ、ニガナ、カワラマツバ、オケラなどを区分種としてカシワ—オオバザサ群落がまとめられた。

d. ハンノキ—オオバザサ群落

Alnus japonica-Sasa megalophylla-Gesellschaft

流水沿いのハンノキ林の立地がやや高く、乾燥化しているところでは、タチアザミ—ハンノキ群集が変形してハンノキ—オオバザサ群落に変わる。他の疎林の植物群落と比較し、ハンノキ、ヤチダモ、カンボク、レンゲツツジで区分されるハンノキ—オオバザサ群落がまとめられた。

ハンノキ—オオバザサ群落は低木層の植被率が10%ときわめて少ない。草本層には、サワフタギ、ヤマモミジ、カラマツなどの木本植物の芽生えとともにオオウバユリ、ヤマドリゼンマイ、ヒメシダ、トリアンショウマなど湿生草本植物の生育がみられる。

ハンノキ—オオバザサ群落はさらに乾燥すると、周辺のコナラ、ミズナラ林の構成種が生育し、オオバクロモジ—ミズナラ群集に遷移すると考えられる。

3) オオバザサ群落

Sasa megalophylla-Gesellschaft (Tab. 8)

総合レクリエーションセンター敷地西側に草丈1.8mのオオバザサが優占する植分がみられる。ササが一面に生育している中に、ヤマモミジ、エゾイタヤ、ハイイヌツゲなどのブナ林を構成する木本植物や、ハンノキ、ノリウツギ、レンゲツツジ、ヨシ、ヒメシダ、ザゼンソウなど湿生植物がわずかに混生している。このようなオオバザサ優占群落はオオバザサ群落としてまとめられた。

一般にササが優占する植分は自然植生は風衝地や、湿原の周辺など環境条件の厳しい立地に持続群落として生育する。オオバザサ群落は一度伐採されたあとの復元途上の植分でさらに長い時間をかけて遷移が進み疎林を形成し、森林に移行するものと考えられる。

Tab. 8 オオバザサ群落
Sasa megalophylla-Gesellschaft

Datum d. Aufnahme:	調査年月日	'74 10 20
Höhe ü. Meer (m):	海 抜 高	441
Größe d. Probestfläche (m ²):	調 査 面 積	1×5
Höhe d. Vegetation (m):	植 生 高	1.8
Deckung d. Vegetation (%):	植 被 率	98
Artenzahl:	出 現 種 数	17
<u>Trennart d. Gesellschaft:</u>	群落区分種	
<i>Sasa megalophylla</i>	オオバザサ	5.5
<u>Sonstige Arten:</u>	その他の種	
<i>Euonymus alatus</i> var. <i>apterus</i>	コマユミ	+・2
<i>Ilex crenata</i> var. <i>paludosa</i>	ハイイヌツゲ	+・2
<i>Alnus japonica</i>	ハンノキ	+
<i>Acer palmatum</i> var. <i>matsumurae</i>	ヤマモミジ	+
<i>Acer miyabei</i> var. <i>glabrum</i>	エゾイタヤ	+
<i>Larix leptolepis</i>	カラマツ	+
<i>Pourthiaea villosa</i> var. <i>laevis</i>	カマツカ	+
<i>Symplocos chinensis</i> var. <i>leucocarpa</i> f. <i>pilosa</i>	サワフタギ	+
<i>Hydrangea paniculata</i>	ノリウツギ	+
<i>Phragmites communis</i>	ヨシ	+・2
<i>Rhododendron japonicum</i>	レンゲツツジ	+
<i>Lastrea thelypteris</i>	ヒメシダ	+
<i>Angelica decursiva</i>	ノダケ	+
<i>Serratula coronata</i> var. <i>insularis</i>	タムラソウ	+
<i>Euphorbia sieboldiana</i>	ナツトウダイ	+
<i>Symplocarpus renifolius</i>	ザゼンソウ	+

4) カラマツ植林

Larix leptolepis-Forst (Tab.9)

姥屋敷のレクリエーション施設敷地内にはカラマツ植林が比較的広い面積で行なわれている。カラマツ植林内にはカスミザクラ、カンボク、ツタウルシで区分される林分とハイイヌツゲ、ミヤマガマズミ、ミヤマナルコユリで区分される林分がみられる。カラマツ植林は日本全国の比較的広い範囲で高海拔地域において行なわれている。姥屋敷では7~14mの樹高で比較的低く人為的管理が少ないため、クリ、ホオノキ、コナラなどコナラーミズナラオーダーの構成種が生育している。林床にはオオバザサが被度 2~4 と優占している。

カラマツは林業的には材として利用されるよりもチップにされ紙に利用されることが多い。

5) アカマツ植林

Pinus densiflora-Forst (Tab.10)

姥屋敷内にはカラマツ植林の他にアカマツ植林が敷地面積の半分を占めている。樹高 8~10m と低いが、姥屋敷・小岩井牧場から網張スキー場に向かう地域にはアカマツ天然林と立て札がたてられた立地にはアカマツが樹高15~23mと高くのび自然林構成種から草原要素まで数多くの種類が生育しているが回復がよい立地ではハイイヌガヤもみられる。

アカマツ林は自然林としては、岩角地の乾燥した立地に先駆植生として群落を形成している。小岩井有料道路周辺のアカマツ天然林は、アカマツ植林後、自然に放置して現在の状態になっていることを示していると考えられる。したがって、小岩井有料道路周辺のアカマツ林においては、その種組成は、潜在自然植生を決定する有力な決め手となる。



Phot. 18 カラマツを使った境界林と、広い牧草地。開放景観を利用した建造物設置と、閉 Ausgedehnte Weiden werden von *Larix leptolepis*-Forsten begrenzt.



Phot. 19 カラマツの間から開放景観を臨む。森と草原の利用方法を考えることが望まれる。

Weite Aussicht zwischen *Larix leptolepis*.



鎖景観の自然遊歩道や探究路などの利用による自然の最小限の利用が理想とされる。

6) スギ植林

Cryptomeria japonica-Forst (Tab. 11)

姥屋敷内ではスギ植林が1ヶ所みられた。樹高10mと低いが高木層にスギの植栽以外にフジ、ヤマブドウ、カラマツが混生しジャングル状になっている。低木層にはミズキ、ホオノキ、オオモミジ、ムラサキシキブ、ツノハシバミ、サワシバなどが種類豊富にみられる。姥屋敷に隣接する小岩井牧場内のスギ植林は樹高23mにまで生長し、自然林であるブナ林構成種のヒメアオキの生育が確認された。

7) ススキ群落

Miscanthus sinensis-Gesellschaft (Tab. 12)

耕作放棄後4~5年経つとススキ、ノコンギク、アキノキリンソウ、ミツバツチグリ、キンミズヒキなどススキ草原構成種が生育する。株立ちしたススキの根元に低茎のあるいはほふく性のキク科、バラ科植物が量は少ないが生育する。

総合レクリエーションセンター敷地内では2ヶ所調査が行なわれたが、共通種が少ない。人為的影響の相違と森林伐採後などのススキ群落であることなどが関連して共通種が少ないと考えられる。

Tab. 12 ススキ群落
Miscanthus sinensis-Gesellschaft

Nr. d. Aufnahme:	調査番号	1	2
Datum d. Aufnahme:	調査年月日	74	74
		10	10
		21	21
Exposition:	方位	SW	NE
Neigung (°):	傾斜	5	3
Größe d. Probestfläche (m²):	調査面積	15×6	3×5
Höhe d. Krautschicht (m):	草本層の高さ	2	2
Deckung d. Krautschicht (%):	草本層植被率	95	98
Artenzahl:	出現種数	18	8
<u>Trennarten d. Gesellsch. u. Kenn- u.</u>	群落区分種及び上級単位の		
<u>Trennarten d. höheren Einheiten:</u>	標微種と区分種		
<i>Miscanthus sinensis</i>	ススキ	5.5	5.5
<i>Artemisia princeps</i>	ヨモギ	1.2	+
<i>Aster ageratoides</i> var. <i>ovatus</i>	ノコンギク	+2	.
<i>Solidago virga-aurea</i> var. <i>asiatica</i>	アキノキリンソウ	+	.
<i>Astilbe thunbergii</i> var. <i>congesta</i>	トリアシショウマ	+	.
<i>Calamagrostis hakonensis</i>	ヒメノガリヤス	+	.
<i>Potentilla freyniana</i>	ミツバツチグリ	+	.
<i>Agrimonia pilosa</i>	キンミズヒキ	+0.2	.
<i>Cirsium nipponicum</i>	ナンブアザミ	.	+
<i>Rubus crataegifolius</i>	クマイチゴ	.	1.2
<u>Begleiter:</u>	随伴種		
<i>Brachypodium sylvaticum</i>	ヤマカモジグサ	+0.2	.
<i>Erigeron canadensis</i>	ヒメジョオン	+	.
<i>Geranium thunbergii</i>	ゲンノショウコ	+	.
<i>Sasa senanensis</i>	クマイザサ	+0.2	.
<i>Clematis apiifolia</i>	ボタンズル	+	.
<i>Acer palmatum</i> var. <i>matsumurae</i>	ヤマモミジ	+	.
<i>Carex stenostachys</i> var. <i>cuneata</i>	ミチノクホンモンジスゲ	+	.
<i>Carex siderosticta</i>	タガネソウ	+	.
<i>Paulownia tomentosa</i> (kult)	キリ 植栽	1.1	.
<i>Celastrus orbiculatus</i>	ツルウメモドキ	+	.
<i>Sasa megalophylla</i>	オオバササ	.	2.2
<i>Rubus parvifolius</i>	ナワシロイチゴ	.	+
<i>Dioscorea tokoro</i>	トコロ	.	+
<i>Rubia akane</i>	アカネ	.	+0.2

8) オオイタドリ群落

Polygonum sachalinense-Gesellschaft (Tab. 13)

川沿いの、増水により年に1~2回冠水する立地には草丈2~2.5mに達する高茎草原が帯状にみられる。このような草原はオオイタドリ、ヤグルマソウ、ウド、オニシモツケ、ハンゴンソウ、カノツメソウを区分種としてオオイタドリ群落にまとめられた。

オオイタドリ群落は、多くは河辺の冠水をうける富窒素性の立地に高茎草原を形成しているが、時に道路際などにも帯状に群落を形成する。

Tab. 13 オオイタドリ群落
Polygonum sachalinense-Gesellschaft

Nr. d. Aufnahme:	調査番号	1	2
Datum d. Aufnahme:	調査年月日	'74	'74
		7	7
		7	8
Höhe ü. Meer (m):	海拔高	425	404
Größe d. Probestfläche (m ²):	調査面積	1×8	2×8
Höhe d. Vegetation (m):	植生高	2	2.5
Deckung d. Vegetation (%):	植被率	85	85
Artenzahl:	出現種数	20	29
Trennarten d. Gesellschaft:	群落区分種		
<i>Polygonum sachalinense</i>	オオイタドリ	4.4	4.4
<i>Rodgersia podophylla</i>	ヤグルマソウ	2.2	2.2
<i>Aralia cordata</i>	ウド	2.3	1.2
<i>Filipendula kamtschatica</i>	オニシモツケ	1.2	1.2
<i>Senecio cannabifolius</i>	ハンゴンソウ	1.2	+2
<i>Spuriopimpinella calycina</i>	カノツメソウ	1.2	+2
Begleiter:	随伴種		
<i>Sasa megalophylla</i>	オオバザサ	2.2	2.3
<i>Carex foliosissima</i>	オクノカンスゲ	1.2	1.2
<i>Astilbe thunbergii</i> var. <i>congesta</i>	トリアシショウマ	+	+2
<i>Wisteria floribunda</i>	フジ	+	+

出現一回の種

Außerdem je einmal in Aufn. Nr. 1: *Osmundastrum cinnamomeum* var. *fokiense* ヤマドリゼンマイ 2.2, *Panax japonicus* トチバニンジン 1.2, *Dioscorea nipponica* ウチワドコロ +, *Trillium smallii* エンレイソウ +, *Viburnum opulus* var. *calvescens* カンボク +, *Vitis coignetiae* ヤマブドウ +, *Ligustrum tschonoskii* ミヤマイボタ +, *Cirsium nipponicum* ナンブアザミ +, *Rhus ambigua* ツタウルシ +, *Euonymus alatus* var. *apterus* コマユミ +, in 2: *Petasites japonicus* var. *giganteus* アキタブキ 2.2, *Lysichiton camtschaticense* ミズバショウ 1.2, *Carex dolichostachya* var. *glaberrima* ミヤマカンスゲ 1.2, *Asperula odorata* クルマバソウ 1.2, *Carex curvicolis* ナルコスゲ 1.2, *Matteuccia orientalis* イヌガンソク 1.1, *Fueraria lobata* クズ +2, *Acer palmatum* var. *amoenum* オオモミジ +, *Staphylea bumalda* ミツバウツギ +, *Rubus palmatus* var. *copto-phyllus* モミジイチゴ +, *Angelica genuflexa* オオバセンキュウ +, *Athyrium vidalii* ヤマイヌワラビ +, *Cacalia hastata* var. *tanakae* イヌドウナ +, *Maackia amurensis* var. *buergeri* イヌエンジュ +, *Epimedium cremicum* キバナイカリソウ +, *Akebia quinata* アケビ +, *Galeola septentrionalis* ツチアケビ +, *Equisetum arvense* スギナ +, *Saussurea nipponica* var. *sugimurae* ナンブトウヒレン +.

9) タケニグサータラノキ群落

Macleaya cordata-Aralia elata-Gesellschaft (Tab.14)

森林伐採後 2~4 年の立地にタケニグサ、コウゾリナ、ナンブアザミ、タラノキ、ヤマウルシ、イガホウズキ、ヌルデ、ヒヨドリバナ、クマイチゴで区分されるタケニグサータラノキ群落がみとめられた。

タケニグサータラノキ群落は総合レクリエーションセンター敷地内にはみられないが、隣接した伐採地にみられる。相観的には初夏メマツヨイグサ、コウゾリナの黄色い花と、タケニグサ、ヒメジョオン、アキカラマツの白い花、さらにナンブアザミの赤が混生し、お花畑状を呈している。伐採後 3~5 年でクマイチゴ、タラノキ、サンショウなど有刺植物群落に移りかわる。

10) カモガヤ群落 (牧草地)

Dactylis glomerata-Gesellschaft (Tab.15)

レクリエーションセンター敷地の北東に残されている草原にはカモガヤ、シロツメクサ、ナガハグサ、オオアワガエリなどのヨーロッパ産の植物を播種している牧草が広くみられる。このような外来植物群落 (Ausländische Gesellschaften) は牧草地や牧場に広くみられ、とくに北海道などは空地に逃げ出してヨーロッパの雑草群落と同じ構成をつくっていることが多い。日本で牧草地に利用されている種は、ヨーロッパのヨーロッパスマグヤーオオカニツリグサクラスの構成種が多く利用されている。

カモガヤ群落はさらにアカツメクサ、ヨモギ、セイヨウタンポポで区分される植分と、オオバコ、エゾノギンギン、ゲンノショウコで区分される下位群落単位に下位区分される。

11) ナギナタコウジューハチジョウナ群集 (畑地雑草群落)

Elsholtzia ciliata-Sonchus brachyotis-Ass.(Acker-Unkrautgesellschaft)
(Tab.16)

高海拔地や高緯度地方では畑作物の種が異なる。その立地を指標する畑地雑草群落は一般にヤブツバキクラス域などの低海拔あるいは低緯度地方ではカラスビシャクーニシキソウ群集がみとめられる。姥屋敷ではナギナタコウジュ、ハチジョウナを群集標徴種とするナギナタコウジューハチジョウナ群集にまとめられた。ナギナタコウジューハチジョウナ群集は人為的管理の程度によりオオイヌタデ、タニソバ、ハコベで区分されるオオイヌタデ亜群集と、メヒシバ、ヒメジョオン、ヌカキビで区分されるメヒシバ亜群集に下位区分される。メヒシバ亜群集には畑耕作放棄後 1~2 年で、ヒエ、ギンギンが個体数多く生育している植分と、ハチジョウナ、ヒメムカシヨモギ、ノコンギク、ナワシロイチゴ、キジムシロなどやや安定した立地に生育する植分がみられた。

Tab. 14 タケニグサ—タラノキ群落
Macleaya cordata-*Aralia elata*-Gesellschaft

Datum d. Aufnahme:	調査年月日	74 7 7
Höhe ü. Meer (m):	海拔高	28
Größe d. Probefläche (m ²):	調査面積	15×10
Höhe d. Vegetation (m):	植生高	1.5
Deckung d. Vegetation (%):	植被率	80
Artenzahl:	出現種数	33
<u>Trennarten d. Gesellschaft:</u>	<u>群落区分種</u>	
<i>Macleaya cordata</i>	タケニグサ	2.2
<i>Picris hieracioides</i> var. <i>glabrescens</i>	コウゾリナ	1.2
<i>Cirsium nipponicum</i>	ナンブアザミ	1.2
<i>Aralia elata</i>	タラノキ	1.1
<i>Rhus trichocarpa</i>	ヤマウルシ	+
<i>Physalium japonicum</i>	イガホオズキ	+
<i>Rhus javanica</i>	ヌルデ	+
<i>Eupatorium chinense</i> var. <i>simplicifolium</i>	ヒヨドリバナ	+
<i>Rubus crataegifolius</i>	クマイチゴ	+
<u>Sonstige Arten:</u>	<u>その他の種</u>	
<i>Oenothera biennis</i>	メマツヨイグサ	3.3
<i>Erigeron annuus</i>	ヒメジョオン	2.2
<i>Sasa megalophylla</i>	オオバザサ	2.2
<i>Commelina communis</i>	ツユクサ	1.2
<i>Sasa senanensis</i>	クマイザサ	1.2
<i>Anthoxanthum odoratum</i>	ハルガヤ	+ .2
<i>Oxalis corniculata</i>	カタバミ	+ .2
<i>Stellaria neglecta</i>	ミドリハコベ	+ .2
<i>Lespedeza bicolor</i> f. <i>acutifolia</i>	ヤマハギ	+ .2
<i>Thalictrum minus</i> var. <i>hyptoleucum</i>	アキカラマツ	+ .2
<i>Pueraria lobata</i>	クズ	+ .2
<i>Dioscorea tokoro</i>	トコロ	+
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ	+
<i>Arisaema angustatum</i> var. <i>peninsulae</i>	コウライテンナンショウ	+
<i>Pteridium aquilinum</i> var. <i>latiusculum</i>	ワラビ	+
<i>Brassica campestris</i> subsp. <i>napus</i> var. <i>nippo-oleifera</i>	アブラナ	+
<i>Swertia bimaculata</i>	アケボノソウ	+
<i>Morus bombycis</i>	ヤマグワ	+
<i>Patrinia villosa</i>	オトコエシ	+
<i>Hydrocotyle ramiflora</i>	オオチドメ	+
<i>Castanea crenata</i>	クリ	+
<i>Angelica genuflexa</i>	オオバセンキュウ	+
<i>Equisetum arvense</i>	スギナ	+
<i>Lastrea thelypteris</i>	ヒメシダ	+

Tab. 15 カモガヤ群落
Dactylis glomerata-Gesellschaft

Nr. d. Aufnahme:	調査番号	1	2	3	4	5	6	7	8
Datum d. Aufnahme:	調査年月日	74	74	74	74	74	74	74	74
		10	10	10	10	10	10	10	10
		21	20	20	20	21	20	20	20
Exposition:	方位	W	N	S	SE	SW	SE	SE	L
Neigung (°):	傾斜	5	5	5	10	5	5	3	
Größe d. Probefläche (m ²):	調査面積	5×5	5×5	5×5	10×20	5×5	10×10	10×10	10×10
Höhe d. Krautschicht (m):	草本層の高さ	0.2	0.15	0.2	0.2	0.15	0.2	0.3	0.2
Deckung d. Krautschicht (%):	草本層植被率	60	70	95	80	40	80	70	70
Artenzahl:	出現種数	11	11	3	5	6	5	9	8
<u>Trennarten d. Gesellsch.:</u>	<u>群落区分種</u>								
<i>Dactylis glomerata</i>	カモガヤ	3·3	4·3	3·3	5·4	3·3	5·4	4·4	3·3
<i>Trifolium repens</i>	シロツメクサ	+·2	+·2	2·3	·	1·2	·	·	3·3
<i>Poa pratensis</i>	ナガハグサ	·	·	5·3	1·2	·	2·2	+·2	·
<i>Phleum pratense?</i>	オオアワガエリ?	2·3	·	·	·	·	·	·	·
<u>Trennarten d. unteren Einheiten:</u>	<u>下位単位区分種</u>								
<i>Trifolium pratense</i>	アカツメクサ	+·2	2·2	·	·	·	·	·	·
<i>Artemisia princeps</i>	ヨモギ	+	+	·	·	·	·	·	·
<i>Taraxacum officinalis</i>	セイヨウタンポポ	+	+	·	·	·	·	·	·
<i>Plantago asiatica</i>	オオバコ	·	+	·	·	+	+	+	+
<i>Rumex obtusifolius</i>	エゾノギンギン	·	·	·	+	·	+	1·2	1·2
<i>Geranium thunbergii</i>	ゲンノショウコ	·	·	·	·	·	·	1·2	+
<u>Begleiter:</u>	<u>随伴種</u>								
<i>Erigeron annuus</i>	ヒメジョオン	+	+	·	·	+	·	·	·
<i>Oenothera erythrosepala</i>	オオマツヨイグサ	+	·	·	·	·	1·2	·	+·2
<i>Polygonum longisetum</i>	イスタデ	+	·	·	·	·	·	+	1·2
<i>Chenopodium album</i>	シロザ	+	·	·	·	·	·	+·2	·
<i>Plantago lanceolata</i>	へらオオバコ	·	·	·	+	+	·	·	·

出現一回の種

Außerdem je einmal in Aufn. Nr. 1: *Potentilla freyniana* ミツバツチグリ +, Nr. 2: *Rubus parvifolius* ナワシロイチゴ +, *Petasites japonica* フキ +, *Sasa senanensis* クマイザサ +, *Adenophora triphylla* var. *japonica* ツリガネニンジン + 2, in 4: *Sonchus asper* オニノゲン +, in 5: *Equisetum arvense* スギナ +, *Zoysia japonica* シバ +·2, in 7: *Hydrocotyle ramiflora* オオチドメ +, in 8: *Viola grypoceras* タチツボスミレ 1·2.

Tab. 16 ナギナタコウジュ—ハチジョウナ群集
 Elsholtzia ciliata-Sonchus brachyotis-Ass.

Nr. d. Aufnahme:	調査番号	1	2	3
Datum d. Aufnahme:	調査年月日	'74	'74	'74
		7	10	10
		9	21	20
Größe d. Probestfläche (m ²):	調査面積	5×5	10×10	5×5
Höhe d. Vegetation (m):	植生高	0.6	0.3	0.8
Deckung d. Vegetation (%):	植生の植被率	50	90	70
Artenzahl:	出現種数	10	14	19
<u>Kenn- u. Trennart d. Ass. u. höheren Einheiten:</u>	群集及び上級単位の標徴種			
<i>Chenopodium album</i>	シロザ	3.3	+	+
<i>Elsholtzia ciliata</i>	ナギナタコウジュ	+2	+2	1.2
<u>Trennarten d. Untereinheiten:</u>	下位単位区分種			
<i>Polygonum lapathifolium</i>	オオイヌタデ	3.3	.	.
<i>Polygonum nepalense</i>	タニソバ	1.2	.	.
<i>Stellaria media</i>	ハコベ	+	.	.
<i>Digitaria adscendens</i>	メヒシバ	.	3.3	1.2
<i>Erigeron annuus</i>	ヒメジョオン	.	+2	1.2
<i>Panicum bisulcatum</i>	ヌカキビ	.	+	3.3
<i>Echinochloa crus-galli</i> var. <i>frumentaceum</i>	ヒエ	.	3.3	.
<i>Rumex obtusifolius</i>	エゾノギンギシ	.	1.2	.
<i>Sonchus brachyotis</i>	ハチジョウナ	.	.	2.2
<i>Erigeron canadensis</i>	ヒメムカシヨモギ	.	.	2.2
<i>Aster ageratoides</i> var. <i>ovatus</i>	ノコンギク	.	.	+
<i>Rubus parvifolius</i>	ナワシロイチゴ	.	.	+
<i>Potentilla fragarioides</i> var. <i>major</i>	キジムシロ	.	.	+
<u>Begleiter:</u>	随伴種			
<i>Artemisia princeps</i>	ヨモギ	1.2	.	+2
<i>Commelina communis</i>	ツユクサ	1.2	+2	.

出現1回の種

Außerdem je einmal in Aufnahme Nr. 1: *Zea mays* トウモロコシ 2.3, *Trifolium pratense* アカツメクサ 1.2, *Agrostis stolonifera* ハイコヌカグサ 2.2, Nr. 2: *Cucurbita moschata* var. *melonaeformis* カボチャ 1.2, *Trifolium repens* シロツメクサ +2, *Dactylis glomerata* カモガヤ +2, *Quercus serrata* コナラ +, *Oenothera biennis* メマツヨイグサ 1.2, *Setaria faberi* アキノエノコログサ +, *Artemisia japonica* オトコヨモギ +, *Oenothera erythrosepala* オオマツヨイグサ 1.2, *Petasites japonicus* フキ +, *Equisetum arvense* スギナ +, *Setaria glauca* キンエノコロ +2, *Taraxacum officinale* セイヨウタンポポ +, *Phleum pratense* オオアワガエリ +2, *Salix vulpina* キツネヤナギ +

2. 植 生 図

岩手県岩手郡滝沢村の電電公社総合レクリエーションセンター敷地内において現存植生図および潜在自然植生図が縮尺1：4 000の地形図上に描かれた。

1) 現存植生図

岩手山山麓部一帯はなだらかな丘陵地が連なり起伏した山なみにおおわれている。滝沢村の一角に位置する総合レクリエーションセンター敷地は 海拔 439～466m のゆるやかな小丘陵地である。

この地域には自然植生がきわめて少なく現存植生図で示されているように河川ぞいの浅い泥炭地にハンノキ林が帯状に、自然に近い形で残されているだけである。ハンノキ林は一般にかつて低湿地の浅い泥炭地に広く生育していたと考えられるが現在では農耕地、とくに水田として地形が利用されて、自然林はほとんど残されていない。岩手山山麓部では一部牧畜の遊び場としてハンノキ林の残存林をみる事が可能である。

敷地の北東部は牧草地が広がっている。谷部の泥炭地の自然林のハンノキ林と人為的影響により存続している二次林、植林、牧草地の調和が、レクリエーションセンター敷地内に、岩手山山麓部の半自然生景観の縮尺図として配分されているのが現存植生図より読みとられる。

A 自然植生

総合レクリエーションセンター敷地内には自然植生はほとんど残されていないが、敷地南側のガンド沢周辺にのみ、紫系の色で示されたタチアザミハンノキ群集が残されている。タチアザミハンノキ群集は、東北地方では比較的狭い面積で点在して残されている。現在水田として利用されている地域はかつてこのハンノキ群落が多くおっていたものと考えられる。春季・夏季に、林床にミズバショウ、タチアザミ、サクラソウなど、あるいは木本植物のズミ、カンボク、クロウメモドキ、ウワミズザクラなどが季節に応じて花を開く。敷地西側に流れるグンダリ沢周辺は地形がV及びU字形を示しているためハンノキ群落はみられない。自然植生の草本植物群落は面積が狭いため現存植生図には示されなかった。

B 代償植生

総合レクリエーションセンター敷地の大部分は人為的影響によりおきかえられた代償植生によりおおわれている。かつて薪炭林として伐採された敷地南部はオオバクロモジミズナラ群集が樹高 10～18m の萌芽林を形成している。一部伐採後間もない3～8年の地域ではオオバザサが優占した疎林を形成している。立地により生育する樹木や構成種が異なり、ミツバウツギオオバザサ群落、カスミザクラオオバザサ群落、ハンノキオオバザサ群落及びカシワーオオバザ

サ群落がみられる。年数を経っていない立地ではオオバザサのみの優占群落を形成している。

レクリエーションセンター敷地の約50%を占めて、スギ、アカマツ、カラマツの植林が行なわれている。

総合レクリエーションセンター敷地北東部はかつて牧草地として利用されていた。現在もカモガヤ群落などの牧草地が残されている。東部に一部耕作畑地がみられる。

C その他

敷地内の宅地・裸地は酒井氏宅だけである。開放地域は Gond 沢及びグンダリ沢が示されている。

2) 潜在自然植生図

敷地内の植生の大部分は人為的影響によりまったく替えられた代償植生である。したがって潜在自然植生を調査する際に現存植生と土壌断面、さらに周辺の自然植生の残存植分について比較が行なわれた。敷地内では河川沿いの泥炭地はタチアザミ・ハンノキ群集、小丘陵地はヒメアオキ・ブナ群集、河川沿いはヤナギ群落やジュウモンジ・サワグルミ群集で代表される湿生林がみとめられる。一部谷地に林床が荒されたハンノキ林がみられる。ハンノキ林は湿地で狭い谷ぞいに帯状にみられるため土地利用するためには多くの人手が必要とされるため比較的残されている。総合レクリエーションセンター敷地ではこのハンノキ林がわずかな面積ながら残され、現在広く日本各地でみられる水田の昔の姿一ふるさとの自然がこの一角に残されている。現存植生図で示されるように総合レクリエーションセンター敷地は、長い間定期的な伐採、刈りとりにより本来の自然林は生育しておらずに、コナラ、ミズナラの二次林、カラマツ植林、スギ植林におきかえられている。あるいはキャンプ場予定地に側溝が掘られ水が流されているために周辺にアキタブキの群落やヤナギの疎林が復元している。

1. ヒメアオキ・ブナ群集

総合レクリエーションセンター敷地内では表層土は5～10cm、黒色土が45～90cm、さらに砂質ローム土が堆積し、砂礫層と互層をなしている。適湿からやや乾性立地が形成されている。

代償植生はオオバクロモジ・ミズナラ群集でまとめられるコナラ、ミズナラ林や、アカマツ、カラマツ、スギ植林が多い。構成種をみると、ブナ林（ブナクラス）構成種がきわめて多い。この地域では、ブナ林の自然植生は海拔450m以上の仙岩峠周辺、800m以上の岩手山に残されているにすぎない。種組成の比較を行なうと、姥屋敷では過度の人為的影響が加わっているため、ヤブツバキクラス域のコナラ林に共通するコナラ、クリ、カマツカ、ガマズミ、ムラサキシキブ、ヤマグワ、マルバアオダモ、ヒカゲスゲなどの生育がみられる。ブナクラスの構成種ではオオモミジ、オオバクロモジ、コハウチワカエデ、オオカメノキ、ハウチワカエデ、ベニイタヤナ

どが生育し、ブナ林の成立を裏づけている。低海拔地の植物と、高海拔の植物が混生しているのは、伐採による攪乱により低海拔域に生育する種が上昇し、さらに高海拔地に生育するミヤマザクラ、タカネザクラ、ナナカマドなどが下降したものと考えられる。

姥屋敷では構成種の大部分が次項のマルバマンサクーブナ群集の構成種をもたないことよりヒメアオキーブナ群集が潜在自然植生と考えられる。

2. マルバマンサクーブナ群集

姥屋敷の最高海拔地では黒土層が30～40cmと比較的浅く、乾燥しやすい立地にある。したがって、乾燥立地、あるいは高海拔立地に生育するマルバマンサクーブナ群集の潜在域がわずかな面積だが海拔440m付近にみとめられる。

3. タチアザミーハンノキ群集

現在タチアザミーハンノキ群集が残されている立地は、泥炭化した酸性立地である。この地域にはタチアザミーハンノキ群集の現存生育地のみが潜在自然植生と考えられる。

4. シロヤナギ群集他

ゴンド沢の側溝建設地の斜面には現在イヌコリヤナギやバッコヤナギ群落のみがみられる。水流が流れるようになった場合、この土堤はシロヤナギ群集他のヤナギ林が生育するものと考えられる。

5. ジュウモンジシダーサワグルミ群集

グンダリ沢周辺は比較的急傾斜の立地でせばまれている。また排水のよい砂礫土壌と、川の堆積土が混合され、時に一部氾濫がおこる立地にはオオイダドリ群落のみがみられる。このような立地にはジュウモンジシダーサワグルミ群集が発達すると判定される。

6. ハルニレ群集

ゴンド沢周辺から、一部カモガヤ群落の牧草地にかけ、ゆるやかな傾斜で比較的地下水の高い立地がみられる。このような立地ではヒメアオキーブナ群集が排水が悪いことにより生育不可能で、ハルニレ群集の潜在域が考えられる。

7. 開放水域

ゴンド沢、グンダリ沢には流水がみられる。流水中には特別な植生が生育していないので開放水域として示された。